

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K16	氏名	増田 謙太郎
研究主題 —副主題—	通常の学級と協働する特別支援教室の在り方 —模擬的な実践及び調査を通じて—		
所属校	江戸川区立篠崎第三小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>東京都では、「東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画」において、「発達障害の児童・生徒もやがては社会参加していくことを考慮すれば、在籍学級や在籍校において教育環境の整備に努めることは、発達障害の児童・生徒やその保護者のみならず、学級の友達や支援に関わる教員や保護者同士にとっても大きな意義がある」とし、通常の学級に在籍する発達障害の児童・生徒が自分の通う学校を離れて通学する「拠点校方式」から、すべての小・中学校に「特別支援教室」を設置し、通級指導学級の教員が巡回し指導・相談を行うという「重層的な支援体制」への移行の構想を明らかにしている。</p> <p>本研究では、特別支援学級の担任である筆者が、勤務校の小学校にて「重層的な支援体制」の第1層にあたる特別支援教室を模擬的に行い、在籍学級担任との「協働」による児童への支援や指導の効果と限界を明らかにしていく。また「重層的な支援体制」の第2層にあたり、新たに巡回指導を行う情緒障害等通級指導学級（以下、通級学級）の現地調査を行い、特別支援教室構想に際しての現場レベルでの課題を探り、有効な手だてを提案していきたい。</p>
II 研究の方法	<p>1 在籍学級担任との「協働」による児童への支援や指導の効果と限界を明らかにしていくために、筆者の勤務校にて特別支援教室の模擬的な実践を行う。</p> <p>(1) 4名の児童の個別の取り出し指導。実施頻度は週1回1単位時間（45分間）程度。指導期間はY年4月から12月まで。 A・B児は、書字・読字の指導。C児は在籍学級での学習の補充。D児は感情コントロールに関する課題（自立活動）を重点的な指導内容とする。</p> <p>(2) 在籍学級担任へのコンサルテーション（週1回）。休み時間や放課後に担任と該当児童についての指導方針の確認や相談を行う。</p> <p>(3) 指導期間終了後の担任へのアンケートの実施と分析。</p> <p>2 特別支援教室構想に際しての現場レベルでの課題を探るために、東京都内の通級学級（情緒・言語）、学習指導室、NPO法人等にて現地調査を行う。</p> <p>(1) 授業観察 (2) 管理職・担任・担当者へのインタビュー (3) 施設見学 (4) 巡回指導記録等の分析（「特別支援教室」を先行的に実施してい</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>る学校にて)</p> <p>1 模擬的な特別支援教室の実践</p> <p>(1) 事例1 文字を書くのが遅く、イライラの募りやすいことが多いA児(6年生)</p> <p>担任へのコンサルテーションは、特別支援教室の担当者から助言を与えるという関係性ではなく、A児が在籍学級で行ったエピソードを共感・支持し、在籍学級担任にとって取り組みのよい面を強化していけるようにした。また、フットワークよく教室へ出向き、短時間でも児童にとって本質的な話し合いができるようにした。取り出し指導を開始してまもなく、目標とした適切行動「学習中にイライラすることを減らす」が改善され、続いて「文字を正しく枠内に書く」ことの効果が見られた。クラスの友達との遊びの中で字を小さく書けるようになったというエピソードもあり、取り出し指導の直接的効果であるとは断言できないが、コンサルテーションと連動して取り組んだ成果の一端であるととらえることができよう。</p> <p>指導期間終了後の担任へのアンケート調査では、取り出し指導とコンサルテーションの時間・回数ともに「ちょうどよい」との回答があった。また、特別支援教室の担当者への要望として、「A児の指導についてのアイデアがほしい」「教室に入ってTTで指導できるとよい」「相談にのってほしい」「障害についても理論を教えてほしい」とあった。</p> <p>(2) 事例2 書字の課題と、自己コントロール力の低いB児(4年生)</p> <p>(3) 事例3 知的な遅れが疑われるC児(6年生)</p> <p>(4) 事例4 怒りの感情コントロールに課題のあるD児(3年生)</p> <p>2 東京都内の情緒障害等通級指導学級への調査より</p> <p>管理職や担任へのインタビュー調査からは、特別支援教室構想に対しての現場での課題を「システム」「指導内容」「児童への懸念」「通級指導学級の存在意義」の四つのカテゴリーに分けることができる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>○特別支援教室の担当者が行うコンサルテーションは、担任のキャリアや思いに応じた「寄り添い型のコンサルテーション」が有効である。</p> <p>○児童の認知スタイルに応じた個別指導を行っていくことで、週1回1時間程度の取り出し指導においても効果が見られた。</p> <p>○特別支援教室の担当者には、発達障害の児童に対する指導技術があるだけでなく、通常の学級での指導への般化の視点での知識や、担任へのコンサルテーションを行う能力が専門性として求められる。</p>